

レガシーを追求しました！

弁護士知財ネット 常務理事
弁護士 末吉 亙

1 はじめに

1970年夏、中学2年生の筆者は、学校の任意参加イベントで、大阪万博1970を日帰りで訪れました。太陽の塔がとても印象的だったのと、長時間の行列の末、日本館を見学したことしか憶えておらず、残念ながら、内容面での記憶は全くありません。そこで、是非、大阪・関西万博2025も見学しようと、本企画に参加することとしたのです。

まず、2025年6月20日（最高気温は34℃程度）に日帰りで大阪・関西万博2025にトライしましたが、予約がとれた三菱未来館だけの見学となるなか、ミャクミャク関連グッズを沢山ゲットした次女の一人勝ちでした。この時は、長時間、大屋根リングの日陰での休息となり、同リングに大変お世話になりました。

さらに、2025年8月18日～19日（最高気温は36℃程度）に再度トライしましたが、予約がとれたのは、三菱未来館とPASONA NATUREVERSEだけでしたので¹、予約がなくても楽しめる、ネパール館、マレーシア館、バルト館²、コモンズ-A～コモンズ-E³をも見て回りました結果、多くの国々が一所懸命参加していることがよくわかりました。⁴

このように、東京からの参加でもあり、いろいろハンディもあったのですが、東京の強みも生かして、万博のレガシーを改めて追求することとしました。

2 太陽の塔

大阪万博1970のレガシーといえば、岡本太郎の太陽の塔ですね。この太陽の塔建設当時の事情

1 前者三菱館では生命進化と未来の火星への移住を素敵なCGで鑑賞し（6月20日と合わせ合計2回）、後者パソナ館では、iPS心臓と生命進化の樹が印象的でした。

2 ラトビアとリトアニアが参加しています。

3 複数の国などが1つの建物に出展する「共同館（コモンズ）」は、万博ならではの魅力のひとつ。「コモンズ-A」には29の国と地域、「コモンズ-B」には29の国と地域、「コモンズ-C」には11カ国、「コモンズ-D」には25の国と地域が参加しています。ここまでで、94の国と地域です。「コモンズ-E」は万博漫画展です。「コモンズ-F」には3カ国が参加していますが、時間がなく、残念ながら見学できませんでした。

4 とくに、キューバの熱心な踊りのステップ指導は人気を集めていましたし、ウクライナの展示スペースに、多くの人々が列をつくっていたのが印象的でした。

を、企画展「岡本太郎と太陽の塔－万国博に賭けたもの」(2025年)⁵に取材してみましょう。

テーマは「進歩と調和」だ。万国博、万国博というとみんなモダンなもので占められるだろう。ぼくはそれに対して逆をおつけなければならないと思ったんだ。闘いの精神だ。近代主義に挑む。何千年何万年前のもの、人間の原点に帰るもの。人の眼や基準を気にしないで、あの太陽の塔を作ったんだ。

〔岡本太郎『にらめっこ問答－人生相談』(集英社、1980年)〕



〔左は企画展「岡本太郎と太陽の塔－万国博に賭けたもの」(2025年)の図録表紙、
右は、同企画展のポスター〕

アッと思った。メインゲートの正面に、シンボルゾーン全体をおおって巨大な大屋根がかけられている。40mの高みに、幅150m、長さ350m、厚みが10mという、大規模なスペースフレームの構造体が吊り上げられる。まさにそれは私の主張した未来の空間だ。・・・よし、この世界一の大屋根を生かしてやろう。そう思いながら、壮大な水平線構想の模型を見ると、どうしてもこいつをボカン!と打ち破りたい衝動がむらむら湧きおこる。優雅におさまっている大屋根の平面に、ベラボーなものを対決させる。屋根が30mなら、それをつき破ってのびる—70mの塔のイメージが、瞬間に心にひらめいた。頂上に目をむいた顔を輝かせ、会場全体をへいげいし、まっすぐに南端の高台に立つランドマークをにらんでいる。・・・プランニングを建築家たちに見せると、はじめはあまりうれしい顔をしなかった。・・・ところが実際の塔ができ上がってゆき、大屋根と同調してそのスケールが見えはじめると、私がいささかあっけにとられるほど、好評なのだ。はじめは疑問をもっていた人たちまで、塔を見上げながら、凄い、こんなものは見たことがない、ほんとうにベラボーだなあ、と嬉しくてたまらないふうだ。「太陽の塔」は「タロー・タワー」「ベラボー・タワー」などと、あ

5 2025年4月26日～7月6日、神奈川県にある川崎市岡本太郎美術館にて開催されました。なお、同美術館は、生田緑地(供用面積95.5haの都市公園)の夏でも涼しい森に抱かれています。

だ名がつき、まったくエキスポ70のシンボルそのものになってしまった。

〔岡本太郎「万国博に賭けたもの」・丹下健三（監修）＝岡本太郎（監修）＝黒川紀章（構成）
『日本万国博建築・造形』（恒文社、1971年）所収〕

「芸術は爆発だ。」とする岡本太郎の溢れるエネルギーを感じますね。
少し、映像イメージを見てみましょう。^{6、7}



〔黄金の顔と太陽の顔〕



〔黒い太陽〕

太陽の塔は、①塔の正面頂部に金色に輝き未来を象徴する「黄金の顔」、②正面に現在を象徴する「太陽の顔」、③背面に過去を象徴する「黒い太陽」という3つの顔を持っています。この塔は、過去・現在・未来を貫いて生成する万物のエネルギーの象徴であると同時に、生命の中心、祭りの中心を示しており、博覧会来場者（約6,400万人）に多くの感動を与えたことでしょう。もっとも、この塔を受け入れた、丹下健三（大屋根の設計者）など、関係する多くの芸術家、学識経験者などの鷹揚さにも驚かされます。

博覧会当時、太陽の塔地下展示には「地底の太陽」といわれる顔も展示されていました。「地底の太陽」は、高さ約3メートル、全長約11メートルにもなる巨大な展示物であったとされていますが、博覧会終了後の撤去作業から55年経った現在も行方がわからない状態となっています。

太陽の塔の内部の展示空間には、鉄鋼製で造られた高さ約41メートルの「生命の樹」があり、樹の幹や枝には大小さまざまな292体の生物模型群が取り付けられ、アメーバーなどの原生生物からハ虫類、恐竜、そして人類に至るまでの生命の進化の過程を表しています。⁸

6 黄金の顔および太陽の顔、ならびに黒い太陽は、いずれも太陽の塔の模型（1/300、造形制作は繪宙計畫、川崎市岡本太郎美術館にて購入）の写真です。撮影筆者。

7 約10年前、大阪大学大学院での講義をするため何回か通いました。その時、モノレールに乗って、太陽の塔の正面から背面まで（帰りはこの逆順）ぐると拝見したのですが、丁度いい高さからの眺めということもあり、とても興奮したのを憶えています。

8 太陽の塔の内部は、耐震化工事を経て2018年から一般公開されています（ただし、予約制）。万博閉幕後に行方不明になっていた塔地下の展示物「地底の太陽」も復元して展示されています。また、上記川崎市岡本太郎美術館での企画展では、太陽の塔の内部をCGで再現した映像も公開されました。なお、太陽の塔は、2025年8月27日、国の重要文化財に登録されています。

ところで、この太陽の塔を正しく理解するには、同時期に制作進行していた岡本太郎のもう一つの代表作である絵画「明日の神話」と並べて見る必要がありますので、これをつぎにみてみましょう。

3 明日の神話

もうひとつの岡本太郎の代表作である絵画「明日の神話」(1969年)は、壁画としてメキシコでホテルのロビーに設置するために制作され、同ホテル倒産によって行方不明になっていました。これが、幸運にも2003年に発見され、2008年から東京・渋谷駅のコンコース内に設置されており、いつでも鑑賞できます。高さ5.5メートル、長さ30メートルの大きさと、壁面を広く覆い、我々を圧倒する作品です。



〔岡本太郎「明日の神話」(1969年)、川崎市岡本太郎美術館所蔵〕

上掲の画像は、川崎市岡本太郎美術館が保有する作品のものです⁹。描かれているのは原爆が炸裂する悲劇の瞬間です。しかしこの作品は単なる被害現場の絵ではありません。人は残酷な惨劇さえも乗り越えることができる、そしてその先にこそ「明日の神話」が生まれるのだ、という岡本太郎の強いメッセージが込められているとされています。

過去・現在・未来を貫いて生成する万物のエネルギーを表した「太陽の塔」と同時期に制作され、「塔と対をなす」とされるこの「明日の神話」は、原爆の悲惨さを乗り越えるエネルギーを表しており、岡本太郎の最高傑作のひとつであって、岡本芸術の系譜のなかでも欠くべからざる重要作品です。この作品が、太陽の塔のレガシーを支えています。

4 大屋根リング

大阪・関西万博2025のレガシーとしては、大屋根リングを挙げることができます。

この藤本壮介の大屋根リングは、開かれた円環です。分断を超えたつながりの構築を可能にするこの円環は、未来の希望を象徴しています。この点、藤本壮介の大規模個展「藤本壮介の建築：原初・未来・森」(2025年)に取材してみましょう。¹⁰

多様でありながら、ひとつ。現代は多様性の時代である。同時にそれは、残念なことに分断の時代となる危険をはらんでいる。世界各地の様々な文化やライフスタイルが一堂に会する万博という場において、豊かな多様性を称賛すると同時に、分断を超えたつながりを体験することができれば、それは未来への希望となるだろう。この会場をデザインするにあたっては、誘致時のコンセプトから引き継がれた「非中心・離散」の理念によって一人ひとりの違い

9 この所蔵品は、もう少し小さいサイズです。この作品は、何点かあるようです。

10 この大規模個展は、2025年7月2日～11月9日、東京六本木・森美術館にて開催。

を鼓舞し、そこに「つながり」を重ね合わせた。それによって、無数の異なるものたちがひとつの世界を共有しているという感覚を来場者が体感することができる場を目指している。

万博の会場全体を象徴する「ひとつの空」は、世界中の人々が共有する普遍的な存在である。この空は、会場全体を包み込み、来場者がどこにいても見上げることができる。異なる背景を持つ人々が同じ空を共有し、ばらばらなものの中にあっても一体感を感じられる空間をこの会場に据える。

〔『藤本壮介の建築：原初・未来・森』（大規模個展図録、2025年）より〕

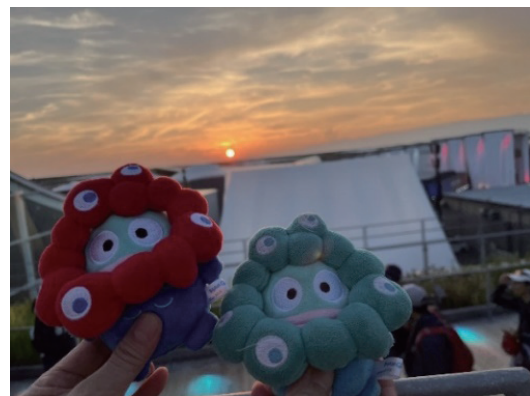


〔左は上記大規模個展の図録表紙。右は、同個展のポスター〕

大屋根リングは、建築面積：61,035.55m²、内径：約615m、外径：約675m、幅：約30m、高さ：約12m（外側約20m）〔来場者が歩くことができるスカイウォークの高さ〕、使用木材：（国産）スギとヒノキ、および（外国産）オウシュウアカマツ〔国産が約7割、外国産が約3割〕となっているとのこと。巨大な構築物です。



〔万博ポスター2点での大屋根リング〕



〔大屋根リングから眺めた夕日をバックにミャクミャクとハンギョドンのコラボ（なりきりぬいぐるみ）2点〕¹²

11 何故か、大屋根リングのライトアップを見に行きたくするようなポスターです。

12 夕方4時を過ぎると、少し涼しくなり、大屋根リングの上から夕陽を眺めるのが最高。また、6月20日の訪問時には、ミャクミャクのぬいぐるみは売り切れでしたが、ここにあるようなコラボグッズは出回っていました。写真はサンリオ社へのライセンスグッズ。推し活派の心理をくすぐる販売戦略（数量限定、期間限定、販売場所限定〔右のぬいぐるみは会場内限定〕など）はお見事。なお、サンリオ社の理念「みんななかよく」は万博に似合いますね。

藤本壮介は直観も駆使しつつ、理知的な試行錯誤を繰り返していく粘り強い建築家です。分断の時代の憂鬱を抱えながらも、「ひとつの空」を希求する希望を持っています。太陽の塔がつきやぶった大屋根から見えていた空よりも、より広がりのある空になっているとともに、全体を包み込む役割も担っています¹³。また、大屋根リングは、日本の伝統的な建築様式（貫（ぬき）接合）に最先端の技術を組み合わせているため（下の写真参照）、ギネスブックに登録された世界最大の木造建築物であるにもかかわらず、安定性を備えています。現在、万博閉幕後の保存が議論されていますが、200mか350mかの一部保存案が有力です。費用の点が大きなネックとなっているようです。ただ、レガシーは、みんなの声援と自身のパワーで生き残るとも考えられますね。「太陽の塔」や「明日の神話」がそうであったように。



〔上記個展での模型展示〕

5 静けさの森とミスト

ここ迄レガシーを追求してきましたが、筆者のお気に入り2025を2つ挙げてみます。



13 会場面積が大阪万博1970の約半分であるうえ、今回はパビリオンの高さを制限したこともあり、大屋根リングに上った時の眺望も最高です。

一つ目は、静けさの森です。万博会場中央にある直径20mほどの池を囲むように、万博記念公園をはじめ大阪府内の公園等から、将来間伐予定の樹木など約1,500本を移植しています。枯れゆく予定であったいのちを再生し、生態系との共創を象徴する空間となっています。この静けさの森を舞台に、アートプロジェクトが展開されていて、たとえば、前頁下の写真（撮影筆者）の作品は、オノ・ヨーコの「Cloud Piece」（平和と人権）。地面に掘られた穴の底に鏡を仕込むことで、空を映し、まるで空の雫をためるかのように見せる詩的なコンセプトをもつ作品。「空」というあらゆる人々に開かれた「共有の風景」を見つめながら、社会や国境を超えたつながりへの意識を高めつつ、平和について思いを巡らせるような体験をつくり出しています。ここは、喧噪のなかでホッとする空間です。



二つ目は、万博会場中央付近の「いのちのパーク」内の特設ミスト（上の写真、撮影筆者）。15分間隔で3分間、相当量のミストが下方から上方へ発生します。このミストは酷暑の中でのクールダウンとして利用させて頂きました。本当に救われました。視覚的にも、幻想的な風景が素敵なアートですね。15分間隔の待ち時間がとても長いように感じられるくらいでした。ただ、この濃い霧のなかで、迷子になってしまうケースもあったようです。

6 万博記念公園のこと

今回、レガシーを追求して、初めて気づいたことがあります。それは、万博記念公園全体が大阪の千里丘陵を再生させるという、ザ・レガシーなのではないかということです。

万博記念公園は、大阪万博1970の跡地にあり、太陽の塔だけでなく、日本庭園、アスレチック、万博記念競技場、巨大立体アスレチック迷路、自然文化園、自然観察学習館、テニスコート、大阪日本民芸館、フットサル場、足湯温泉などの総合的な施設となっていて、さらに、森の再生にも取り組んでいます。¹⁴

太陽の塔¹⁵も取り壊しが前提だったところ、みんなの声などで保存されることになりました。直前まであったビジネスセンター構想が覆り、大阪万博1970の跡地は、博覧会を記念する「緑に包まれた文化公園」として整備されることとなったのです¹⁶。ここでの森の再生は、本来の自然

14 万博記念公園の面積は260haです。ちなみに、大阪万博1970の会場面積は330ha、大阪・関西万博2025の会場面積は155haです。

15 大屋根リングの建築家藤本壮介も、ミャクミャクのデザイナー山下浩平も、ともに1971年生まれですが、太陽の塔から直接の刺激を受けています。

16 当初からシンボルとして保存されることが決まっていた「エキスポタワー」は、残念ながら老朽化により2003年に撤去されました。

植生を再現し、「自立した森」（多様な動植物と共存し安定している森）に導こうとする本格的なものです。この再生プロジェクトは、55年経過しましたが、必ずしも満足な結果にはまだ至っていません。今後も研究を重ね、100年かけての森の再生をさらに目指しています。

今となってみれば、万博記念公園全体が、多様性や持続可能性という現代の基本理念にピッタリですね。

これこそ、レガシーだと思います。大いに、敬意を表したいと思います。



〔畑祥雄『奇跡の森EXPO' 70』〕¹⁷⁾

ですから、「大阪・関西万博2025のレガシー」にも、筆者は、大いに期待しています。

(2025年9月6日脱稿)

17 写真家畑祥雄が、万博記念公園での森の再生の経過を写真に収めた貴重な写真集（ブレーンセンター・2024年）の表紙。